

穴

榆木啓子

SE ちよのまどろみの中を流れる、冷氣(あ
の世から流れてくる冷たい空気)を想
像させる音

ちよ(55)「誰? 雅彦さん、あなたなの?
そんな眼をしてわたしを見ないで」

M I N

アナウンサー「ラジオドラマ『穴』」

M F O

SE 病院の廊下。ワゴンを押す音。看護師
のサンダル(ただし、はっきり
と分かつてはダメ)
80歳のちよの声にかかります

綾(23)「(80歳のちよの記憶の向こう
からの声。遠くから聞こえる感じで) だ
め、おばあちゃんって呼ばせるんだから」
ちよ(80)「ふふ(笑い声)」

男(58)「なにか、思い出しましたか」
ちよ「まあ、取りつく島もない。産まれてく
る子にはちよさんって言わせようと楽しみ
にしていたのに ああ(あんな)いたら、
こっちの気持ちなんておかまいなし」
男「あの娘? お嬢さんですね、確か綾
さんといいましたか」
ちよ「そういうところだけは主人とそっくり

薄いまゆ毛も。(おかしそうに) 血は争え
ないのね」

男「私の息子も、私に似てげげじまゆ毛
ですな」

ちよ「主人の弓なりの眉毛、そりゃあ薄いん
ですよ。『榊の家は公家の出だってお袋が
言つてたけど、この眉毛を見ればまんざら
ありえない話でもないよな』 ふふ、鏡の
前でひげそり後の顎を撫でながらよくそう
言っていましたっけ」

SE あの世からの冷氣を感じさせる音

ちよ「だれ?」

男「誰も、いませんよ」

ちよ「そう? (呟くように) 冷たい空
気…」

男「榊というお名前は確かに由緒正しいっ
て感じですよ」

ちよ「いいえ、(笑って) 昔は蔵もたくさん
ありましたけど、私たちがこちらに来てか
らは、みんな人手にわたってしまっ…」

SE さらに冷たい空気の流れる音

ちよ「なんだか寒くありませんか? そう、

あの朝も、初夏にしては寒かったですよ」

男「あの朝、というと」
ちよ「だから、孫が生まれた朝ですよ。その
日のことを知りたいってあなた言ったじゃ

ないですか」

男「そうでした。いや、面目ない」

ちよ「遠くで電話が鳴っていて…」

SE 遠くで(二十五年前の)電話の呼び出
し音

ちよ「…いえ、わたしは横に… 電話の横に
…」

SE 少し強くなる電話の呼び出し音

ちよ「だって娘がいよいよ産気づいて、付き
添っている婿からの知らせを待っていたん
ですから…」 ただ、」

電話音消える

ちよ「どうしたんでしょうね、あの日はとて
も疲れていて…」

男「何か、お疲れになるようなことでもあ
りましたか、あの日に」

ちよ「そんな、三年もまえのこと、覚えちゃ
いませんよ」

男「三年前? 確か、二十五年前、でしたよ
ね」

ちよ「まあ、冗談はよしてくださいな。二十
五年も前なら、わたし、今 八十歳って
ことになるじゃありませんか。いやです
ね。勝手におばあさんにしないでください

な

男 「そうでしたか いや、私の記憶違いでしょう」

ちよ 「とにかくどうしようもなく疲れていて

… 1つの間にか眠っていたんでしょ

よ だから、電話の音が遠くに聞こえて…」

SE 部屋に入ってくるサンダル音

看護師 「変わりありませんか？」

男 「ええ、大丈夫ですよ」

看護師 「何かありましたら、呼んでください」

SE 去っていくサンダル音

ちよ 「でも、おかしいわね… 娘のおなか

が日に日に大きくなるのを見ながら、あんなに待ち焦がれていたのに。予定日が近づくと、もう気もそぞろでしたよ

な の 肝心な時に眠るなんて…」

男 「そんなものかもしれませんな。私も」

ちよ 「わたし、お昼をいただいたかしら？」

男 「もう、二時を回ってますから。確か、

五目御飯じゃなかったですか」

ちよ 「そうですね、食いしん坊って思わな

いでくださいいね。このごろお腹がすくの

早いんですよ」

男 「何か、買ってきましようか」

よって言ったんですよ」

SE 新生児の泣く声（バックグラウンドM的に）

ちよ 「何度も何度も、おばあちゃんよって」

SE 新生児の泣く声にまざって若夫婦の幸せそうな笑い声

ちよ 「婿がいいんですかって笑ってましたけど、もう呼び方なんてどうでもよくなって」

SE 前の音に55歳のちよの幸せそうな笑い声

ちよ 「可愛い子、わたしの天使。娘が綾だから、孫は綾香。いいえ、婿が決めたんですよ、わたしじゃありません。そんなあなた、

でしゃばりなこと。でも、綾と同じ」

SE すべての音が消える

ちよ 「この子のためなら何でもできる… 今でもそう思ってますよ」

男 「ほう、例えは」

ちよ 「例えはって、だから、何でもですよ」

男 「…ところで、産院の方へはご主人も一緒に

緒に行かれたんですか」

ちよ 「…御主人って、私に夫はいませんか」

男 「…先ほど、弓なりの眉毛の話をしたがてましたか」

ちよ 「（笑って）おかしなことをおっしゃるのね」

男 「いや、それに蔵の話も…」

ちよ 「（歌を歌いはじめる）エチゴ ニイガタ サンジョウで

シバタ ゴセン ムラマツ、ナガオカ ヤヒコ クガミの

ゴカイチョウ」

男 「珍しい唄ですな」

ちよ 「ええ」

男 「どこの唄ですか」

ちよ 「…羽根つき唄」

男 「羽根つき 奥様の子供のころは、正月には羽根つきをしたんでしょ」

ちよ 「ええ、お蔵の前で、大好きなメリンスの赤い着物を着せてもらって」

男 「羽根つきは、どなたとしましたか」

ちよ 「…姉やいとこたちと それに…」

男 「それに」

SE 羽根つきの音

SE 音が途絶えて、いとこ（14）「またお兄さま。（笑って）今度はどこにしようかな」

SE 少女たちの笑い声

ちよ(10) 「(笑って) 雅彦さんの顔」
雅彦(15) 「まいったなあ。そんなに
おかしな顔をしているの」
ちよ「だって、おでこにバツテンだなんて」

SE 少女たちと雅彦の笑い声
ちよ80歳の声に戻って

ちよ(80) 「(眩き) 雅彦さん…」
男 「雅彦、どなたですか？」
ちよ「……」

男 「御主人の、お名前ですよね」
ちよ「……分からない 眠いわ」

男 「では、楽しい話でもしましょうか」
ちよ「楽しい話？」

男 「…孫が生まれるっていうのはどのよう
な気分ですか？ いや、私は甲斐性がなくて
子どもがでなかつたものですから、なん
ともその辺が分からないですよ」

ちよ「それはもう、言葉にならないくらい嬉
しいものですよ 愛する娘の子供です
から」

男 「そうでしょうな。いや、実にくらやま
しい。ところで、産院の方へは、ご

主人も一緒に行かれたんですか」
ちよ「いいえ、わたしは一人で駆け付けたん
ですよ。あの人は前の日にチリに出かけま
したからね」

男 「チリ？」
ちよ「南米のチリ、サケの養殖ですよ、(少

し得意げに) 研究室務めですから。その前
には海老をどうするとかでタイへ行ってま
したし」

男 「ほう、海外が多いんですね」
ちよ「ええ、チリには年に何度も」

男 「では、奥様も一緒に？」
ちよ「(強く) いえ、わたしは一度も。これ
からだってそんなところ行くものですか」

男 「何かありましたか？」
ちよ「(自分でも不思議そうに) えっ、理由
は…ありませんけど…」

SE 冷気を想像させる音

ちよ「本当に寒いこと、眠くなってきたわ…」
男 「もう少し、お付き合ひ願えませんか」

ちよ「(面倒くさそうに) もう少しって、い
つたい何を聞きたいの？」

男 「御主人のことなのですが」
ちよ「主人ですか？ だから、話したでしょ
う？ チリで行方不明になったんですよ。

あれつきり帰ってこなかったんですから」
男 「パスポートに、出国の記載がないんで
すよ」

ちよ「そんなこと、わたしは知りませんよ。
確かに、そう言って発つたんですから」

男 「おかしいですな」
ちよ「眠いわ…」

男 「そうですね。少しお休みになったほう
がいいですな」

男 「お目覚めですか」
ちよ「わたし、寝ていたんですか かな
たは」

男 「いや、近くの者ですよ」
ちよ「…何かわたしにご用ですか」
男 「先ほど聴かせていただいた羽根つき唄
ですが」

間

男 「越後、新潟、三条で…」

ちよ「(嬉しそうに) エチゴ ニイガタ
サンジヨウで シバタ ゴセン」

男 「新潟の唄ですね。奥さまは新潟のお生
まれでしたか」

ちよ「十日町です」
男 「ほう、昔は、絹織物、明石ちぢみで有
名でしたな」

ちよ「ええ、わたしの生家は機織り工場(こう
ば)でしたから、朝から遅くまで、機織り
の音がパタン、パタンって聞こえてました」

男 「女工哀史なんて言葉もありましたな」
ちよ「それは大昔の話でしょう。わたしの家
では皆さん、楽しそうに働いておられまし
たよ。パタン、パタンって織り上げ
られる布は、それは美しい織物で、まるで、
蝉の羽のようでした」

男 「御親戚もみな、絹織物関係ですか」
ちよ「いいえ、近くににいる親戚は一件だけで

したけど、あちらは肝煎(きもいり)でした」

男 「きもいり？」

ちよ 「名主のことです」

男 「ああ、新潟の方ではそう呼ぶのですか」

ちよ 「ええ」

男 「…先ほど、いとこさんの話をされてま

したが、そこの方たちですか？」

ちよ 「近くにいろいとこは榊の家だけですか

ら わたし、いとこの話をしてました

の？」

男 「はい。…雅彦さんも榊の方ですか？」

ちよ 「(この人が好きと分かるような言い方

で) 雅彦さん…」

男 「榊雅彦さんです」

ちよ 「ええ。でも、(少し甘ったるい声で)

雅彦さんは、わたしといとこと言つても、

私たち、血は薄いのよ」

男 「と言つと」

ちよ 「雅彦さんのお母様は、雅彦さんをお産

みになったあとすぐに亡くなって、それで

遠縁にあたる榊の家にいらしたの。榊の

家は女の子だけでしたから」

男 「榊さんとは、雅彦さんとは、よく遊ば

れましたか？」

ちよ 「遊ぶと言つても、雅彦さんは、わたし

より五歳も上でしたから、わたしは、ただ

たどうしろをついて歩いてただけで」

男 「(少し笑つて) そうでしたか」

ちよ 「お姉さまや、いとこたちもわたしより

ずっと年上でしたから わたし、気が

気なくて」

男 「お好きだったんですな」

ちよ 「(笑つて) 毎日お祈りしました『早く

大きくなれますように。 私が大人になる

まで、雅彦さんが誰も好きになりませんよ

うに』って」

男 「で、どうでしたか」

ちよ 「(笑つて) 大丈夫でした。あのころの

雅彦さん、川の生物ばかりに夢中になって

いて… わたしいつもびくを持って後ろを

ついて歩いてたんです」

男 「ほう」

ちよ 「雅彦さん、家へもどつてからも、書庫

にこもりつきりで…」

男 「それでは、女性としては詰まりません

な」

ちよ 「いいえ、幸せでした 難しい本を

読んでいる雅彦さんを、ずっと、ずっと見

ていました」

男 「(咳払い)」

ちよ 「ま、ごめんさい。初めてお目にかか

った人に」

男 「いやいや、楽しいお話でした。…結婚

されたのはいつでしたか」

ちよ 「結婚？」

男 「はい、結婚です」

ちよ 「誰が？」

男 「いや、ですから、雅彦さんと奥様です」

SE 川のせせらぎの音(バックグラウンド

M的に)

ちよ 「サケの稚魚は可愛いですよ 春に

なつて雪解けが始まるといつせいに小川を

下つて… 雅彦さんと、」

男 「(いよいよだという気持ちで) 御主人

と」

ちよ 「ええ、(甘ったるい声で) 雅彦さん

と 初めてこちらに来た時に見たんです

一緒になつて、もう十年でした」

SE 川の音に混ざり幸せそうな小鳥のさえ

ずりも

ちよ 「それでもあの人、せせらぎに入れてす

っかり冷たくなつたわたしの両の手を、自

分の手で包んでくれて… 柔らかな手

だなあつて…」

SE 先の音に加えて遠くから聞こえる感じ

で若き日の雅彦の優しい「柔らかな手

だなあ」をエコーのように重なりなが

ら数度

ちよ 「柔らかな手だなあつて そう、あ

のとき綾がお腹にいることを教えたんです

よ。あの子の喜びようつたら」

SE 川のせせらぎに混ざり笑い声のような
楽しい音

ちよ「(幸せの絶頂にいるような声で)俺は
がんばるぞ、世界一いいおやじになるぞつ
て」

SE 一瞬音が強くなりスーッと退く

ちよ「(憎しみをこめた声で)いい親父にな
るぞつて」

男「(息をのむような音)」

ちよ「ええ、主人は帰って来ませんでした」

男「(声にならないような声、あつ、とか)」

ちよ「どこかで眠ってるんでしょよ。よろ
しいんですよ。一人生まれて一人が死ぬ。

帳尻が合ってるじゃありませんか」

男「亡くなったんです：ね？」

ちよ「えつ、わたし今、死んだって言いまし
た？」

男「そのように聞こえましたか」

ちよ「そうですね (悲しげに) でも、
帰ってこなかった夫なんて、死んだも同じ
じゃないですか」

男「それはまた、あつさりしたものですな」

ちよ「三十年も経てば、夫婦なんてそんなも
のでしょう」

男「それにしても」

ちよ「こんな話もう止めましようよ。あなた
もしつこいですね、さつきからもう少し、
もう少しして」

男「いや、申し訳ありません。それでは、

話題を変えましようか：」

ちよ「もう話したくないわ」

男「お茶でも持ってきてましよう」

SE 出て行く男の足音

間

SE 戻ってくる足音

男「少し熱いかもしれませんが」

ちよ「ありがとう」

男「眠ってらしたようですね」

ちよ「いいえ、わたしの庭のことを考えてい
たの」

男「：お宅の庭は素晴らしいそうですね
覚えてらっしゃいますか」

ちよ「覚えてるかって、何おっしゃるの、わ
たしの庭でしょう。ほらそこに：」

SE ベッドのきしむ音(ベッドで体を起こ
し窓の外を見るちよ)

ちよ「：ここは？ (驚いて) わたし、寝
間着を着て、まあ、不作法な
綾は？」

男「御家族はアメリカです。 いや、もう
すぐこちらに戻られるでしょう」

ちよ「疲れたわ：」

SE ちよの静かな寝息

椅子から立ち上がり、出ていく男

少しの間

SE ちよの軽い咳の音
部屋に入ってくる男

男「ご気分はどうですか」

ちよ「(ゆったりと)わたし、どこも悪くな
んてありませんよ」

男「少し、庭でも散歩しましようか」

ちよ「庭 わたしの庭」

男「いや、ここは： 歩くには、今日は
寒いですな」

ちよ「そう」

男「お宅の庭には立派な木がたくさんある
そうですね」

SE 庭の木々のそよぐ音

ちよ「よくご存知ね みんな美しい樹な
の」

男「どのような木ですか。(笑って) うか
がってもそうは知らないのですか」

ちよ「西側に、ナナカマドが三本あるのよ」

男「ナナカマドですか」

ちよ「陽の落ちる前が一番きれい 淡い
光の中に赤い実が浮かび上がって
ベ
ンチに座ってずっと見てるの：」

SE 木々のゆれる音に小鳥のさえずりも

ちよ「正面には目隠しのヒバが何本も ふふ、ヒバの隙間から道を歩く人が見えるのよ。毎日同じ時間に通る男の人がいるの。『今日の夕陽は格別だね、お前もそう思うだろう』 ふふ、誰に話しかけていると思う？」

男 「奥さん、ですか」

ちよ「ううん、ネコなのよ。首輪をつけて毎日散歩してるの。そのネコ、ヒッチコックみたいな顔で、御主人を見上げてうなずくのよ」

男 「（咳払いをして）他にも木はありませんか」

ちよ「…ええ、東側には、紅葉、山帽子、さくらんぼの樹 あれは綾のために主人が植えたんですよ」

SE 今までの音、小鳥のさえずりに加えて、小さな女の子の笑い声が入る

ちよ「雀がさくらんぼをついばむのを見て、『だめでしゅ、だめでしゅ』って綾がほっぺを膨らませて いえ、あれは綾香だったかしら…」

男 「北側には、どんな木がありましたかな」

SE 今までの音が全て消えて

ちよ「北側ですか？ いいえ、あそこには何

にもないですよ」

男 「…そうでしたかな」

ちよ「家の陰ですから、何にも」

男 「何かあったように思うのですが…」

ちよ「北側でしょう…」

男 「白樺が、ありませんでしたか」

ちよ「白樺？ そういえばあったのかも…」

男 「……」

ちよ「（思い出して）そう、古木になって虫がついたので、植木屋さんに抜いてもらったんですよ。抜いたあとに、こんなに大きな穴があいて」

SE 前のちよのセリフ「穴」に重ねて、冷気の音

男 「穴が」

ちよ「ええ、そりゃあ深い穴で、孫が生まれるっていうのに、怪我させちゃいけないから、土を沢山入れてもらったんですよ」

男 「そこから、白骨と、朽（く）ちた毛布が出てきました」

ちよ「白骨と、毛布？」

男 「何か、御記憶にありませんか」

ちよ「まさか、そんなものがあつたら、わたしが気づかないわけないじゃありませんか、毎日庭に出るんですから」

男 「それが、あつたんですよ」

ちよ「そんないい加減なこと言つて、あなた

誰？ お医者じゃないでしょうか？」

男 「自己紹介がまだでした。私は北署の浜田と言います」

ちよ「きたしよ？」

男 「刑事です」

ちよ「警察？ 警察の人がどうして…」

出て行つて！ 出て行つて！

男 「落ち着いてください。大丈夫ですか」

SE 急いで入ってくるサンダル音

ちよの呼吸が荒くなる音

看護師「榊さん、ちよさん、大丈夫ですか？ 私の声が聞こえますか？」

SE 医師の入ってくる足音

医師「榊さん、深呼吸して下さい」

ちよ「（震える声で）綾を呼んで 眠い

わ…」

医師「今日はお帰りください」

男 「そうですね、では、また改めて」

少しの間

SE ちよのまどろみの中を流れる、冷たい空気の音

ここからちよの声は55歳、冒頭のセリフに入る

ちよ(55)「誰? 雅彦さん、あなたなの?
そんな顔をしてわたしを見ないで」

SE 冷気の流れる音

ちよ「わたしだってあの夜から一日も気の休
まる時はなかったんだから 駅前ユ
ースホテルだなんて、おかしいじゃあり
ませんか。仕事が忙しいからって、そんな
ところにあなたが泊まるなんて 若い
人たちが泊まるようなところを知っている
なんて 会社からあなたをつけたの
よ」

SE 街の喧騒

歩くちよの靴音

止まる靴音

後ろから歩いてきた男女が急に立ち止
まったちよにぶつかりそうになり、慌
てて回避する音

若い男「ちつ、なんだよ。おばさん、邪魔な
んだよ」

若い女「ここ、おかしいんじゃない」

SE 通り越していく女の方の笑い声

街の喧噪が遠のいて

ちよ「小麦色の肌の若い女が駆け寄って、あ
なたの首にぶら下がった」

SE バックにちよの心臓の鼓動

ちよ「黒髪だったけど、目鼻立ちが大きくて、
一目で日本人じゃないと分かったわ
気持ち良いほどはちきれそうな体…」

SE 大きくなる鼓動

ちよ「わたしの心臓、バクバクと音を立てて
いた。足がぐにやりと折れそうで、一生懸
命立っていた みずぼらしいわたしの
二本の足…」

SE 次第に小さくなる鼓動

ちよ「仕方がないわ、自分でさえ見るのいや
だもの… あなたが柔らかいと言
ってくれた両の手だって…」

SE 鼓動が消えて、サケの稚魚を見に行っ
た時の三十代の雅彦の「柔らかな手だ
なあ」をエコーのように重ねて

ちよ「わたし、自分に言い聞かせたわ。私と
いるときの、いつものあなただけを見てい
ようって。とても幸せだもの。孫だって生
まれるんだもの (強い調子で) あの
日、あなたが何も言わなかったら、それで
終わったのに」

SE 場面展開の劇的な音

間

SE 階段を上がってくる雅彦の足音

ドアの開く音

ちよ(55)「…あなた、もう出かけるの?」
雅彦(60)「ああ」

ちよ「もう一日だけ伸ばせない? 明日の朝
には孫を抱けるわ」

SE ガラガラ(赤ん坊のおもちや)の音

ちよ「ねえ、見て。納戸から出てきたの。

覚えるでしよう、綾の生まれたときにあ

なたが買って来たのよ」

雅彦「話があるんだ。座ってくれないか」

ちよ「…どうしたの」

雅彦「私と別れてくれないか」

ちよ「…」

雅彦「別れてほしいんだ」

ちよ「何を言ってるの? どうしたの、あな
た」

雅彦「この家はおまえにわたす」

ちよ「いやよ」

雅彦「今まで黙っていたが」

ちよ「あの人ね、あ的小麦色の肌の人」

雅彦「マリアに会ったのか?」

ちよ「マリア…」

雅彦「私の娘(むすめ)だ」

ちよ「…娘？」

雅彦「ああ、彩より三歳下、二十歳だ」

SE ガラガラが床に落ちる音

ちよ「(眩き)娘 娘」

雅彦「初めてチリへ行つたとき、あれの母親に会った。私は初めて恋をした」

ちよ「やめて！」

雅彦「二年後にマリアが生まれた」

ちよ「聞きたくないわ！」

雅彦「いや、聞いてくれ」

ちよ「いやよ」

雅彦「あのとき、俺はお前と別れることも考えた。しかし、そうしなかった。俺は、綾とおまえへの義務を果たそうと決めた」

ちよ「(泣きそうな声で)義務？」

雅彦「いや、義務、とは違う」

ちよ「…わたしは あなたにとり何だったの？」

雅彦「妹、のようなものだった」

ちよ「妹…」

雅彦「だが、信じてくれ、恋とは違うが、俺はおまえを大事に思っていた。本当だ」

SE ちよの嗚咽

SE ちよの嗚咽

雅彦「だが、マリアには可哀そうなことをした。長い間父親が不在だったんだからな。

肩身が狭かったろう これからチリ

で、マリアとルイーザ、マリアの母親だ、

三人で暮らす」

ちよ「わたしは、あなたが好きなのよ」

雅彦「すまない」

ちよ「綾だつて」

雅彦「綾には、わたしのできる限り何でも与えてきた」

ちよ「今になって捨てるの？ あなたがあ

娘(この名前をつけたのよ 美しい織

物のような娘(むすめ)になるようにつて」

雅彦「…」

ちよ「あなた」

雅彦「綾には晁佳君という立派な夫がいる。子供も生まれる。もういいだろう、これ以上私に望まないでくれ」

ちよ「あなた(…)だけ(…)を(…)、見

てきたのよ」

雅彦「この家はおまえたちにわたす。少しだがまとまったものも用意する。それで十分だろう。あとは晁佳君と綾に面倒をみてもらつてくれ」

SE ちよが椅子から立ち上がり、椅子が倒れる音

SE 勢いよくドアを開け出て行くちよの足音

追いかける雅彦の足音

雅彦「待ってくれ、冷静になりなさい、おまえらしくもない」

ちよ「綾が産院で苦しんでいるというのに、家をやるから綾たちに面倒をみてもらえなんて なんてひどい！」

雅彦「頼む、部屋へ戻ってくれ」

ちよ「わたしが綾をどんなに大事にしているか知ってるはずなのに、綾のお荷物になれ

と云うの！」

雅彦「ちよ！」

ちよ「まさか、あなたの娘だったなんて、そんなに長いあいだ私をだましてたなんて、チリでもう一つの家族と暮らしたいなんて！」

雅彦「冷静になれ！」

ちよ「触らないで！」

SE 「わー」という雅彦の叫び声と一緒に 雅彦が階段を駆け落ちる音

SE 場面が戻るの分かるような音

ちよ(55) 「階段の下で、あなたはぴくり

とも動かなかった　あなたを見下ろしてわたしは何を考えていたと思う？
よかったわ、白樺の穴がある。あそこまで引きずっていけば大丈夫　（狂気に満ちた、しかし自分を嘲笑う笑い方で）ふふふ　三十年も一緒に暮らしたというのに、なんて残酷なの：」

SE　冷気の流れる音

ちよ「あなたの体を動かそうとしたら、あなたの目が私を見ていた　ゆつくりと口が開いて、寒い、寒いって　耳をふさいで大声をあげてあなたの声を聞こえないようにした　でも、だめ。寒い、寒いって：」

SE　冷気の動く音

ここから80歳のちよの声

ちよ（80）「（雅彦の体を触って）冷たい：　まだ寒い？　ごめんなさいね：　わたしを迎えに来てくれたの？　わたしでもいいの：　雅彦さん：」